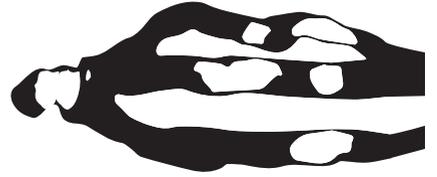
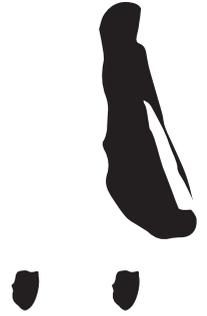
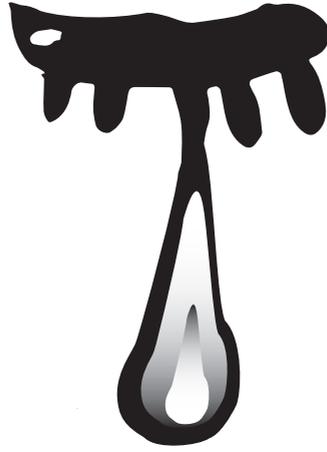


熊本ボ
を通過して
ランティ
ア



目次

1. はじめに

米森千裕（鹿児島国際大学4年）

2. KGKがボランティアをする意味—生き方を通しての伝道にこだわって—

大嶋重徳（KGK総主事）

3. KGKが熊本ボランティアに参加したきっかけとその始まり

松尾献（KGK九州地区主事）

4. 熊本ボランティアの証

藤野主一（九州大学大学院修士2年）

福本謙志（熊本保健科学大学2018年卒業）

渡辺咲季（長崎大学2年）

橋本真由美（広島大学大学院2017年卒業）

李起春（広島市立大学大学院2018年卒業）

新垣義也（明治大学4年）

5. 隣人愛としての災害支援—「愛するとは？」を問われつつ

横田法路（NPO九州キリスト災害支援センター理事長）

6. 熊本ボランティア活動記録（2018年11月現在）

7. 【資料】熊本災復興支援ボランティアKGK派遣チームオリエンテーション

『ボランティアとしての自覚と責任』（2016年4月22日）

1. はじめに

米森千裕（鹿児島国際大学4年）

2016年4月14日、九州地方の熊本県で最大震度7の地震が起きました。

当時、運営委員を務めていたメンバーで自分たちにも何かできることはないか緊急ミーティングを行いました。そこで、KGK九州地区として、月に一度ボランティアに行くことが決定しました。熊本地震から2年以上たった今でも、九州地区のKGK学生や他地区のKGK学生が毎月熊本ボランティアに参加し続けています。

この熊本ボランティアを通して、

多くの学生が

仕えるということ、

寄り添うということ、

そして、

神様の愛を行動で表すということ。

本当に多くのことを教えられてきました。

近年、日本では、多くの災害が起きています。

私たちと同じように生活していた人たちから、ある日突然、「当たり前」が失われていきます。そこには、どのような形であっても「痛み」があります。

もしかしたら、

災害でなくても皆さんのそばには誰かの「痛み」があるかもしれません。「福音」を知った私たちは、その「痛み」に鈍感であってはならないと思います。

すべての「痛み」を知っておられる、私たちの偉大な神様が、「痛み」に対して、「福音」という回復と希望を与えてくださった神様が、今、私たちに望まれていることは何でしょうか。

このブックレットを手にとったあなたが、あなたの遣わされた地にある「痛み」に「福音」を届ける、「地の塩、世の光」として豊かに用いられますように。

2. KGKがボランティアをする意味－生き方を通しての伝道にこだわって－

大嶋重徳（KGK総主事）

はじめに

KGKは東日本大震災の時から、広島のと砂災害、また地域の幾つかのボランティア活動に学生たちを送り出してきました。2018年も西日本において広範囲で大雨に依る洪水の災害も起こり、また北海道での地震もありました。この国において、災害を避けて通ることは出来ません。また日本の教会において、災害支援は宣教的な課題であり、使命です。

しかしKGKが支援活動を行う時、幾つかの声がKGKに届けられることがあります。

「どうしてKGKが災害支援に行くのか？KGKがやるのは学内での伝道だろう！」

「若い学生を被災地に送り、何かあったら、先のある彼らの人生をどう責任取るんだ？」

「学生は暇なんだから、被災地に送れば良い…」

「なぜうちには来ないんだ！」これらの言葉を、非常に複雑な思いでお聞きすることになります。

ホーリスティックな福音理解

私たちKGKが災害の支援の場所にボランティアに行くことは、まさにホーリスティックな福音の理解をしているからです。これまでも大阪の西成でのボランティア、また東京北千住の給食ボランティアにも学生たちと参加をしてきました。

KGKでは「全生活を通しての証」ということを、KGKスピリットとして大切に続けてきました。

「神は彼らに仰せられた。生めよ。増えよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」（創世記1:28）、「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」（同2:15）神様が人間に与えられた使命には、この世界を「従えよ」と、「園を耕せ」とこの世界の管理を託され、耕すという労働を与えられました。神の国の建設がはじまったのです。まさに働くことは喜びであり、神様との交わりでした。しかし人間は罪を犯し、「人は言った。『あなたがわたしのそばに置かれたこの女が』」（同3:12）が食べると言ったからだ、神様との関係も、家族の関係も壊れてしまいました。世界管理の使命もまた「土地はあなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは一生、苦しんで食を得なければならぬ。」（同3:17）とあるように、働くことは苦痛となり、世界管理の使命、神の国の建設を見失ってしまいました。

しかし神様はこの世界に王を立て、預言者を立て、祭司を立て、この世界に神の国の建設を諦めることをされなかったのです。そしてイエス・キリストは「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」と、ご自分の来られた意味を語られ、神の国の福音をこの世界に宣べ伝えられたのです。貧しい人に寄り添い、虐げられているものそばに立ち、失われている魂のために涙されました。そしてご自分の十字架と復活

によって、罪に墮落した世界に、新しい世界が「すでに」始まったのです。しかし「いまだ」その世界は完成をしていません。

キリスト者たちは、罪赦され、永遠のいのちを頂きました。それは天国への片道切符を手に入れて、あとはそれを落とさないように、失くさないように、たまに人に見せて「信じる？」と伝道するためだけのためにクリスチャンになったものではありません。

イエス様の示された（山上の垂訓をはじめ）神の国の福音をこの世界にもたらすために、私達はキリスト者となったのです。そして神様のもたらされた救いとは、魂の領域の救いだけでなく、神様はこの世界と歴史を救いに導き、この世界の全領域に救いは及ぶことだと、KGKはこの福音理解に立ってきました。

KGKの大切にしてきた全生活の証と学生たちの被災地支援

そしてキリスト者学生たちは救われた者として、自分の学部の勉強を行い、研究をし、バイトもするのです。恋愛も救われた者としての恋愛をする。言葉だけではなく生き方とおしての伝道ということを言い続けてきました。そのことが、友達から見て「彼の全部の生活は、キリスト者として生きている」という証をすることを、先輩たちから受け継いできたのです。

その意味では被災地に入っていくのは当然のことでもありました。学生だから時間があるから、「暇だから行く」ではありません。学生たちのボランティア精神が豊かだから行くわけではありません。キリストに出会い、キリストに従い、キリストの救われた場所に赴くのです。信仰の応答として、被災地に行くことを考えているのです。だからこそ民間や公共の開かれたボランティアではなく、祈って、主に仕えるように、地域に仕えておられるボランティアワークに、KGKは学生を送り出したいと願っています。九州キリスト災害支援センターの働きが、震災後すぐに立ち上がったことは、本当に感謝なことでした。

被災地に出かけていくことは、学内での聖書研究会と同じように、被災地でも聖書の言葉に生きることを学生たちと経験することとなります。そこで聖書を文字通り開くわけではありませんが、聖書の言葉に生きるのです。学生たちの人生の全領域で、神の栄光をあらわす生き方をする、とりわけ痛みのある場所で生きることを経験して欲しいと思っています。

阪神淡路の震災の際には

私の経験ですが、阪神淡路の大震災を学生時代に経験をしました。激しい揺れの中で目覚め、本当に再臨が来たのではないかと思ったことを忘れられません。数日間、甲子園に住む姉とは連絡が取れませんでした。翌日から動き出した電車に乗って、大阪梅田に出て、友人の安否を確認しました。痛みと悲しみの声が鳴り響く被災地での経験は、私の深いところに刻みこまれました。そして国際飢餓対策機構がベースとして置いた武庫之荘福音自由教会で、ボランティアを始めたのです。

実はこの時、KGKでボランティアチームを組むことはありませんでした。学生の所属するそれぞれの教会での取り組みに合わせるとというのが、当時の判断であったと思います。しかしボランティアチームを派遣できる教会ばかりでもなく、またワールド・ビジョンや国際飢餓対策機構などのボランティア募集の情報が届いてないクリスチャン学生も沢山おり、「どうしてKGKがその情報を取りまとめることが出来ないのだろうか。」と、当時、全国協議委員をしながら、歯がゆい思いをしたことを思い出します。「学生主体」のKGKだからこそ、学生が派遣を取りまとめることが求められたのかもしれませんが。しかし震災後すぐのあの混乱を学生数人の主体性で、行動できたかと言うと、やはりそれは難しかったでしょう。

やがて主事となった後、福井沖で石油タンカーの油が漏れた際に、金子元主事が関西から数人の学生を連れて、ボランティアに入ったことを知りました。「ああ、KGKもボランティアをやってよいのだ。」と思った時でした。さらに福井豪雨の際には、被災した地域教会をお訪ねし、泥掻き出しを学生たち数名と行いました。そこにはノンクリスチャンの学生も参加してくれ、「クリスチャンもいいことをするんですね。」と言われたことは、驚きと共に伝道の可能性になることを思いました。さらに北陸では働きが知られていないKGKが、地域教会に知って頂く機会となつて、信頼をして頂くようになったことや、学生をKGKに送ってくださる諸教会が増えたことも、少なくない感動でした。

しかし同時に難しさを覚えたのは、地域で開かれているボランティアセンターに入ってボランティアをすることの難しさでした。もちろんボランティアセンターの派遣も大切なことです。阪神淡路の際には、国際飢餓対策機構のボランティアチームに参加した私は、教会が地域にお仕えする経験に感動を覚えました。その経験は、「宣教とは何か」という問いを問うことの出来る経験だったのです。そして祈って始め、祈って終わり、一日の経験を分かち合うボランティアであることがKGKにおいては望まれるボランティアなのではないかと思わされてきました。

震災時に向けられた幾つかの声

2011年3月11日の震災が起こったときは、KGKの学生たちのボランティア派遣に取り組みました。国際飢餓対策機構の清家さんに連絡をとったのは、「被災地に素人が入ったら邪魔になる。プロと組まないといけない。」という思いがあったからです。これは、自分が学生時代に過ごした阪神淡路の経験が大きかったように思います。以下に述べますが、こういう震災でキリスト者としてどのように初動を起こすか、ということは青年期にどのような経験をしているか、ということに大きな影響を及ぼすと思います。そのことは今後の日本で必ず起こるであろう震災に対して、どのように教会が次世代の奉仕者を育てていくかという課題とも関わってきます。

国際飢餓対策機構の清家さんからは、「大嶋、明日、新潟から車で入れるから、新潟駅まで来れたら一緒に行こう。」とすぐに言って頂いて、仙台でのベースキャンプ立ち上げに加わりました。その後、塩竈聖書教会で、KGKからの学生ボランティアを受け入れて頂ける段取りをつけるころまで仙台に滞在しました。その際に、KGKからは大きなチームから小さなチームも含めて50数組のボランティアを東日本に送り続

けました。現在は、いわきで行われている子どもたちの勉強をみてあげる夏のプログラムに参加をしています。また九州では主事の松尾を中心に27便以上も出ており、現在も九州キリスト災害支援センターの助けによって続けられています。

被災地における若者の育成

被災地に入ると学生たちは言葉を失い、自分の無力さに涙をすることとなります。まだ、現地に入る前に集合をしている時は、学生たちの肩には力が入り、意気込んでいます。しかし、必ず学生たちに被災地に出かけていくための心備え、オリエンテーションを事前に行います。宮古など三陸に入るときは、盛岡で近藤愛哉牧師にこのような指導をして頂きました。そこで大切にしてきたこととは、とりわけ「自分の充足感ではなく」、被災された方の思いに立つことでした。そして被災地において、主がこの状況にどのように寄り添おうとしているかを考えること、祈りながら、主に仕えるようにボランティアをすること、そのことを最初に学生たちに伝えます。

これらの指導を現地の教会の先生方にして頂いたのは、本当に助かりました。そして実際、被災地でボランティアを迎え入れている教会では、自己充足型のボランティアが沢山訪れ、受け入れる教会が疲弊しているという現状をも率直にお聞きしました。このような助言によって、私たちのKKGボランティア派遣マニュアルは厚みを増していきました。

「教会の玄関を綺麗にする。靴は揃える。」「誰に対しても、感謝を忘れない。」「必ずリーダーの指示に従う。」「自分の判断で行動をしない。」「現場での急な変更には、いつも臨機応変に対応する。」「教会の使いにくいボランティアにならない。」これらの指導は、「神に従い、教会をたてあげる信仰の育成」を被災地の教会でさせていただいたことに他なりません。

さらに夜には、必ず学生と主事たちの分かち合いと祈り会を毎晩持ちました。わたしたちは学生に聞きます。

「今日、目にした光景のどこに神さまの姿を見ましたか。」彼らはじっと考えます。多くの学生が目にした光景、痛んでいる子どもたちの心を思い起こし、苦しい顔をしながら考えます。学生たちは幾人も涙を流し始め、それでも主のなさろうと、主が寄り添おうとされていることに思いをはせる時に、自らの無力さを超えて働かれる感謝の祈りへと導かれていくことを彼らは経験をしました。被災地でのこの「祈り会」は、日常の中でも見えなくされている主の業に目を留める大きな経験となります。

献身者、これからの震災の備えのために

さらにこれから起こりうる震災の備えのためにも、若い人たちを被災地でのボランティア経験をする必要があると思います。東日本で現地入りをした時に、そこでお会いした人たちは阪神淡路でのボランティア経験をされている人たちがほとんどでした。私自身も「あの人がいる。」「この人がいる。」勝手を知っている仲間の先生方がそこにおられたのです。そこでは緊急の事態ですが、互いのアイコンタクトで「ガソリンがないので、少し分けて欲しい。」「了解。」「水が大量に届いた…。」「あそこ

に配りましょう。」土壇場の場所だからこそ、それまで築かれている関係性がものを言うわけです。

またよく言われることですが、阪神淡路、東日本大震災でも、ボランティアに行った教会の若者たちが沢山、神学校へと献身していきました。まさにそこでは主に仕えること、いのちに最も必要なことが何かを問いかけられる経験をしたからだと思います。

何度も言いますが、この国では今後も大震災を避けることは出来ません。次の震災に備えて、次世代を絶えず育て、被災地に入り、初動の動き方、背後からの支援の仕方、現場での指示系統のとり方を、次世代に経験して行って貰う必要があります。わたしは東日本の時、現地にすぐに入りましたが、それはその当時の総主事が背後で現場の判断をサポートし、その判断に基づく背後からの支援をし続けてくれたからです。九州のときは、現地にいくら入りたくても、九州地区KGK主事の松尾のサポートに徹すると決めていました。このような前線、背後の役割分担も経験をする必要があるのだと思います。

ボランティア経験を通しての伝道

さらに伝道か支援かという問題が取り上げられることがあります。

KGKにおいては支援をともにする伝道を経験させて頂いてきたように思います。なかなか集会や聖書研究会に誘うことのできないクリスチャン学生も、「被災地ボランティア行く？」という誘い方なら誘いやすいと言った学生が居ました。現地入りをするまでの車中の時間は、自然とクリスチャンの話になりますし、ボランティアに入る前には一緒にお祈りをするわけです。自分ひとりだと伝えられなかった学生たちには自信になり、また伝えることに勇気を得ることともなります。さらにノンクリスチャンからは、「なぜこんなにも真剣にボランティアをするのだろうか。」「神はいるのか。」背後にある信仰への関心を持ってくれることともなります。さらに「クリスチャンも良いことをするんだな。」「どこかに大量の資金があると思っていた…素朴なんですね。」東日本で一緒に行った青年は、その後教会で洗礼を受けた報告を聞きました。

生き方を通しての伝道にこだわって

今後も、KGKでは全生活を通しての証にこだわりたいと思います。そして現代の学生は決して暇ではありません。しかしそれでも学生だからこそやりくりをつけて被災地に入ることが出来るのも事実です。多くの団体が去っていくなかで、敢えて踏みとどまり、継続をすることが出来るのも、学生時代の特権です。いわきでもボランティアを続けていく時、学生と子どもたちとの間に信頼関係が生まれ、育ってきました。

また時に「なぜうちには来ないんだ。」というお叱りも受けます。しかし全部をお応えできるわけではありません。その意味では、東北ヘルプ、九州キリスト災害支援センター、岡山キリスト災害支援室のような集まりがすぐに立ち上げられ、すぐさま入っていける場所が明確になったことはとても大きな助けでした。広島のと砂災害の

ときもそうでした。地域教会のすでにできているネットワークがあり、そこで大人のクリスチャンたちが互いに信頼しあって、友情を築いておられることを、若者たちが見ることが出来ることは、どれだけ若者の育成という面でも重要なことでしょうか。

KGKがボランティア派遣をする際に、一つの判断基準にしようと考えているのは、地域教会のネットワークによるボランティア派遣がなされているかどうかということです。KGKはどこまでも地域教会が建て上げられていくことにお仕えしていくことが必要だと思うからです。

KGKが大切にしてきた言葉に、「遣わされた地で福音に生きていく」という言葉があります。神様はその時、その時に、私たちに遣わそうとされている派遣の場所があることを思います。そしてそこで福音に生きる。主が遣わそうとされている場所には行かざるを得ないのです。そして示されている場所が必ず分かるようになりたいと思いますし、そのときはやはり学生たちと一緒に入っていき、そこで主のなされる次世代の主に従う学生の育成を見せて頂きたいと願っています。

3. KGKが熊本ボランティアに参加したきっかけとその始まり

松尾献 (KGK九州地区主事)

4月14日。宮崎大学の訪問を終えてバスに乗っていると、車内のあちらこちらから不気味なアラーム音が鳴り響く。それは大地震を知らせるアラームだった。私は、「自分の身近なところでは災害は起こるはずがない。」と信じ込んでいただけに非常なショックを受けた。震源地は熊本県益城町。そこはKGKでよく使用させていただく教会があり、友達もいて、妻の実家がある場所だった。

震度六強で家が倒壊すると言われている中で、今回の地震は震度7。町は大きな被害を受けた。しかし、この地震は後に「前震」と呼ばれるようになる…その2日後。「本震」が大分・熊本を再び襲い、町はこの2度の地震で壊滅的なダメージを負うことになる。

震源地付近の家のほとんどが押しつぶされ、道路は激しくゆがみ、ひび割れ、電柱は傾いた。水が出ない。食料が手に入らない…あつという間に日常が奪われていく。避難所は避難者であふれ返り、寝返りすらうつことがゆるされない状況であった。余震は続き、そのたびに恐怖で目が覚める。「これからの生活はどうなっていくのだろう。」・・・言い表せないストレスと不安の日々が突然始まっていった。

この非常事態に、KGKは何ができるのだろうか…。私は途方に暮れた。「何かをしなければいけない」という思いに駆り立てられる。しかし一体何ができるのだろうか…祈りか？ボランティアか！？しかし余震が続く被災地に、学生を連れて行くことが本当に正しいことなのだろうか。

迷いと葛藤を抱えた私の背中を、神様はそっと押してくれた。それは、本震二日後。4月18日のことである。この非常事態に、教団・教派の壁を越え、九州各県を中心に、全国から災害支援に長けている団体・牧師・スタッフが50名ほど集まり緊急会議が開かれた。会場は、日本イエスキリスト教団の福岡教会であった。

計らずもこの教会は、私の出席教会でもあったので、横田法路牧師が「KGKもどうですか？」と声をかけてくださり会議に参加することとなった。

急な呼びかけにも関わらず、なぜこれほどの人たちが集まってきたかということ、九州地区は、これまで超教派の交わりが豊かに持たれてきていたこと。そして、その中の幾つかの教会が、東北支援を継続していたことにあった。そしてこの豊かな交わりから「九州キリスト災害支援センター(以下、九キ災)」が生まれていくことになる。

この会議でまず、最初になされたことは、「これからどうするか」という話し合いではなく、礼拝であった。この状況でも、神の愛と神のよきご計画を信じ、教団・教派を超えて、共に礼拝した光景を私は今でも忘れることができない。そして共に御言葉を聞き、「私たちの想いではなく、神様がなさろうとされていることを私たちはしていこう。」と、祈り、会議は始まっていった。

そこには教団や教派の壁を超えて、一致しようとする姿があった。

「現地では道路がひび割れ、車が通れない所があります。ですからバイクが必要です。」

「被災地では、目まぐるしくニーズが変わります。今は水や食料が必要ですが、被災地が落ち着き、お店が開き始めたら、物資よりもお金で支援することの方が有効です。」

「個々でボランティアに出かけたら余計渋滞をつくることになる。一か所に支援物資を集めて2トントラックで運んでいきましょう。」

「私の教会で2トントラックを調達します。」

たった一人では生み出すことができないアイデア…たった一人ではできない支援の広がりが生まれる会議であった。各教会が協力し、キリストの名の故につながるとこんなにも豊かなキリストの手足となって働きが広がるのだ。キリストの体の豊かさがそこにはあった。話し合いの中で、私たちがたどりついた結論は二点であった。

一つ目は、「私たちは、ノンクリスチャン、クリスチャンを問わずに被災者を支援すること。特に、私たちが支援するのは、大きな支援から漏れている人たちに対して。」

目立って大きな働きをすることよりも一人でもそこに痛み苦しむ人がいるならばその痛みを目を留めたい。そこには、一匹の羊をあきらめないキリストの愛があった。

二つ目は「被災された地域教会を通して支援をすること。」

地域教会を超えて、私たちの働きが目立つことが私たちの目的ではない。その地域教会に私たちがお仕えして、地域教会と地域の人たちを結ぶことに仕える。これは、KGKが大切にしている「教会の枝となる働き」に通じることである。

ここに何の躊躇があろうかと、KGKもこの時から「九キ災」の働きに加わらせていただくこととなっていく。これが、KGKが九キ災とつながりを持った最初の出来事である。

第一回目のボランティア

こうして始まった熊本・大分ボランティアであるが、第一回目の活動は、4月28日であった。

7名の学生と共に、私は、被災地に入っていったが、まだ被災地は余震が続いていた。危険を伴うボランティアであったため学生たちには必ず牧師・保護者の了承を得てからの参加をお願いした。

学生たちは、被害の大きさを目の当たりにし、言葉を失っていた。

私たちがボランティアの期間中宿泊させていただいた教会は、九州地区KGKの合宿でもよく使わせていただいていた木山キリスト教会であった。教会の周りの景色は姿を変え、見慣れたあの「益城町」の景色はどこにもなかった。

他県から来た私たちがさえ、大きなショックを受けるのだから、この町に生まれ育ち、この場所で暮らしてきた人たちの痛みは、いかばかりだろうかと思わされた。

日常が奪われた彼らの痛みに寄り添いたいと思いつつも、私たちはボランティア中、ふとしたところで、何度も自分たちの「日常」を持ち出して行動し、言葉を発してしまいそうになった。

断水しているとわかっている、つい蛇口をひねってしまう。

地震で学校がしばらく休みであることを知ってはいても、子供たちに「学校はどう？」と質問しようになる。

気を付けないと、知らないうちに、自分たちの言葉や態度が、被災地の方々を傷つけるということもあるのだ。

そういうことが極力ないように…被災地に入るとはどういうことなのか。そのために、どんな配慮を心掛けたらよいのか、そんな知恵が私たちには必要だった。

KGKは、東日本大震災の時にもボランティアを経験してきたので、その経験をもとに作成された「震災ボランティアの手引き」（※本ブックレットに掲載）を学生たちと事前に読み込んだ。

そこには、私たちがどんな言葉に気を付け、どんな態度で奉仕をするべきかが事細かに書かれていた。初めての震災ボランティアに入る私たちにとって、この先輩専事たちが残してくれた「手引き」に大いに助けられることになった。

この時、私たちは「子供支援のプログラム」を任されることになった。学校が休みになり、友達にも会えず、ストレスや不安を抱える子供たちがいたためだ。

学生が考えたプログラムは子供たちに心に寄り添うものであった。この集会中、子供たちは、笑顔でいっぱいであった。言葉にできないストレスも抱えていただろう…集会が終わっても子供たちはなかなか帰ろうとせず、ある子供は学生に抱きつき、いつまでも学生から離れようとしなかった。

次の日は、教会の近隣のお宅に入って部屋を片付けたり、がれきの撤去をしたり、倒れ掛かったブロック塀の取り壊すなどの作業をした。

言葉も態度にも気を配りながらの活動は肉体だけでなく、私たちの精神もすり減らす。そして、被災者の痛みに寄り添おうとするあまり、自分でも抱えきれない重荷を負ってしまうということもある。そこで、私たちはボランティア期間中、毎晩、分かち合いをした。たった一人で抱えていた思いを吐き出し、信仰の仲間を受け取ってもらい、祈り合う。そして仲間の言葉からも教えられていく…そんな時をもった。

また私たちは、ボランティアを通して、「仕える」とはどういう事か、も考えさせられていった。

ある団体は、おにぎりを百個にぎり、地域教会にいきなり訪れ「おにぎりを配りたいので、人を集めてください」と要求した。教会は「この辺りはみな避難所に避難され誰もいません」と伝えても「それでもよいから人を集めてください。」とお願されたという。

「仕えること」は、自分たちがしたいことをすることではない。自己達成感を得る場所でもない。震災直後は現地のニーズが目まぐるしく変わっていくし、明日の予定もわからない。その臨機応変にも「わかりました。」と仕えることが本当の奉仕ではないか…

時には多くの家具を運び出すことよりも、話をゆっくり聴いてほしいと願われる方もいる。そんな時は、肉体の疲労を伴う満足感を置いて、私たちはその方と、お茶を飲んでゆっくり交わることを選んでいく。

「仕えること」は、痛みの中におられる方々の声を聴き、彼らが必要としていることに柔軟性をもって答えていくことではないかと思わされた。

しかし、被災地に住んでいない学生たちや私にとって、現場の声を聴き「今どんな支援が必要か」をタイムリーに把握するのは困難である。また必要を把握できても、それにどれだけお答えできるかわからない…。もしKGKが独自で、震災支援をしていたら途中で活動が途絶えていただろう。KGKは教会と「枝」としての働きを大切にしているように、ボランティアにおいても諸教会がしようとしている働きの「枝」として仕えていくことが大切なのだ。今日まで私たちが復興支援に関わることがゆるされたのは、九キ災という母体につながっていたからだ。熊本に支援センターが置かれ、在住スタッフがいてくれるからこそ、私たちは現地のボランティアに入っていくことができた。

私たちが九キ災に行けば、「KGKさんは、今日はここです。」と私たちが今日どこに行って、何をしたらよいかをすでに計画してくださっている。

私たちはボランティアをするときに「九州キリスト災害支援センター」のゼッケンを身につける。このゼッケンの真ん中には「キリスト」の文字が刻まれている。いわゆる伝道ができなくても、このゼッケンを身につけて黙々とボランティアをするだけで、その背中から「ああ、あそこのキリストさんね。いつもありがとう。」と地域の人から感謝される。

被災地のあらゆるところに入っていけるのは、九キ災のスタッフが築いてきた信頼関係がゆえである。

さらに、私たちがボランティアを続けることができたのは、KGKが全国規模の超教派の交わりであるからだ。ボランティアに入った学生たちは、SNSを通して、被災地の「今」を自分たちのことばで表現し、同世代の全国のクリスチャン学生たちに発信する。

そこには、自分たちの目で見たりアルが綴られている。ニュースではとりあげられない一人の人の痛みや自分が思わされたことが綴られ、震災が決して終わっていない事を教えてくれる。そして、それを見た学生たちは、自分の教会にもそのことを分かち合っていく。

こうして、小さな分かち合いが、全国的な祈りと献金につながっていく…そして小さな支援の輪が、学生を被災地へと送り出していく大切な一歩、一歩となっていく。

そう思う時に、「私は、まだ九州にボランティアにいけていない」と罪悪感を募らせる必要はないのだ。今いる場所で十分私たちにできることはある。

こうして多くの祈りと支援があって、KGKは、これまで途切れることなく全国から学生を被災地に派遣することができたのだ。

学生インタビュー

私は、初めてボランティアにきた学生に「実際、この場所に来て働いてみてどうだった？」と質問をする。この質問に対して多くの学生が「自分の無力さを感じました。」と答える。

その通りだと思う。大分・熊本地震から2年経ち、震災のニュースは全国でほとんど流れなくなったが、被災地に一歩足を踏み入れてみればわかる。まだ復興とは程遠い現実がそこにあることを。

そこに住んでいる方々と顔と顔を合わせ、話をすると「あの日」のことを昨日のように覚えておられる。地震の度に、あの日の恐怖を思い出す子供たち。仮設の生活が一体いつまで続くのか…見えない将来に不安を抱える人たちがそこにいる。

意気込んでボランティアに参加しても、1日終わってみれば一軒の家の家具すら運び終えることができない自分に出会う。まだ何千軒も片付いていない家があるのだと聞き愕然とする。想像していた復興の速さと現実のスピードに戸惑いを隠せなくなる。

雨になれば尚更だ。できるボランティアは激減する。そしてそんな時は、九キ災の部屋掃除や次回の催しのチラシを折ってボランティアが終わるということもある。「なんて自分は無力なのだろうか・・・。」そう思われる。

また想像していたボランティアとは違い、仮設に住む高齢者と談笑だけして終わった日は、ひそかに「わざわざ飛行機でここに来る必要があったのだろうか。」とも思ったりもする。

しかし、学生たちは「自分の無力さ」を突き付けられながら、何度もこの場所に来ている。

ボランティアをやめないのだ。

それは彼らが、神様の愛に突き動かされているからだと思う。神様が、この場所を諦めておられないのを知っているからだ。そして彼らは神様のことばに勇気づけられて今日もこの地を訪れるのだ。

行動をもってキリストの愛を示す、ということについて(継続の意味)

私にとって震災支援を続ける動機になっている御言葉は、ヨハネ6:1-13である。

そこには5千人以上が抱えていた空腹というニーズを、イエス様が満たされるという奇跡が記されている。イエス様はその奇跡をなさる時に、何も無いところから奇跡を起こされたのではなく、一人の少年の捧げものを用いられた。それは5つのパンと2匹の魚が入った弁当である。少年にとってはこの弁当は、大切な弁当だったのではないかと思う。

しかし、この莫大なニーズを考えると、この犠牲はあまりにも小さく見えた。

弟子の一人アンデレは「これが何になりましたか。」と言った。

しかし、イエス様はこの犠牲を決して小さなものとは見ておられなかった。

イエス様はこの少年の捧げものを受け取り、感謝をささげてから、神の方法で用いられた。

そして必要が満たされた。

大分・熊本震災がもたらした被害は、計り知れない。そして、被災地のニーズもまた計り知れないものである。この膨大なニーズを前に、学生たちが月に1度ボランティアをするのは、5つのパンと2匹の魚を差し出すようなものである。

アンデレが言ったように「これが何になりますでしょうか。」と人には映るかもしれない。

しかし、イエス様の目にはそうは映らないのだ。

そして学生たちの小さな献身を神の栄光のために神の方法で用いられると信じている。

私たちは「神 罪 救い」と書かれているトラクトをポケットに入れているわけではない。

ただ「九州キリスト災害支援センター」のゼッケンを身に着け、黙々と働いてその場を去るということもある。

しかし人々は、私たちの背中の「キリスト」の名をよく見ている。

被災地の中には、この震災で「神がいるならどうしてこんなことが…」と思い、神様に対する怒りや疑いを持っている方もおられるだろう。しかし、私たちがこの場所に足を運び続けることは、彼らの神様へのつまずきの石を1つ1つ取り除いていく行為につながっていると信じている。

そして、1つ1つの石が取り除かれて、やがて彼らがイエス様とお出会いする日があると信じている。

今だって、イエス様はこの被災地の痛みの只中におられる。そして、この痛みの中におられる方々を愛しておられる。そうであるならば、私たちはこれからも被災地に喜んでいきたいと思う。

なぜなら、主あって私たちの祈りや犠牲は、決してむなしくないから…だから、私たちは今日も小さな弁当箱を携えて神様の御前に出たいと思うのだ。

4. 熊本ボランティアの証

藤野主一（九州大学大学院修士2年）

熊本地震後のKGK九州地区とボランティア活動について振り返りたい。

地震の発生した2016年、私は九州地区の運営員会のひとりだった。熊本はKGK学生がおり、また度々合宿でお世話になっている場所で、この地震は私たちにとって非常にショッキングなものだった。熊本地震の本震から2日後になる4月18日夜に運営委員会は臨時のスカイプ会議を行った。私が住んでいた福岡でも体を感じるような揺れが起こるような状況だった。月末に福岡で開催する予定になっていた九州地区の合宿について、また、その後の被災地支援の具体的な方法について話し合った。そこで合宿は予定通り行うものの、希望した一部のメンバーは熊本のボランティアに参加し、福岡からもそのために祈る時間を持つことになった。こうして4月29日、30日の九州地区の合宿とあわせて熊本に派遣したボランティアがKGK九州地区としての第1回の熊本ボランティアということになる。

その後、KGK九州地区では九州キリスト災害支援センターのお支えのもと、毎月1回のペースでボランティアを継続的に派遣してきた。私も何度もこれに参加する機会が与えられた。それを通して被災地に支援できたかはわからないが、私自身が受けることや学ぶことが多かった。引越しのお手伝い、こどもたちと遊ぶことなど、そのような一つ一つから仕えることを学んだ。そこで、思いがけないものをいただくこと、地域の方といろいろなお話をする機会もあった。私個人としては多くの恵みのときであったと思う。

またそこでは日本全国、全世界からのボランティアと会ってともに作業をした。私たち、少なくとも私は、それ以前に熊本との関係があったため、活動に参加する「理由」はあった。しかし、彼らは国内や海外から見ず知らずの地のためにボランティアに参加している。このような姿こそ愛なのだと思う。私もそのような愛をもって仕えるようになりたいと思う。

福本謙志（熊本保健科学大学2018年卒業）

前震の時は、テレビを見ながら、こたつで寝ころがっていました。今までに経験したことのない突然の大きな揺れに電気が消え部屋が真っ暗になり、食器棚が倒れ、窓ガラスが割れる音が聞こえる中、外に逃げることもできず、こたつの中でうずくまっていました。

私の教会は家具のほとんどが倒れ、足の踏み場はなく、玄関には10cmほどの溝ができていました。教会前の道路は地面が裂け、車が通れなくなっていました。教会員の中でも家を失った人や1日中続く余震のために、家の中で寝ることができず、車中泊をせざるをえない方もたくさんいました。

そんな中、初めに名古屋から、その後も全国、また海外からも、教団教派を超えたたくさんの方々のボランティアの方々が来て下さいました。

その方々が、まず初めにしていたことは、祈ることでした。しかも、そこには今までの感謝を含んだ祈りが多くありました。

私は「どうしてこんなことになったのですか、どうか助けて下さい。」というような祈りばかりで、今まで神様がしてくれたこと、神様の恵みの中で生かされていた事実を忘れていました。

やがて教会の中は支援物資でいっぱいになり、益城町のボランティアの拠点になりました。実際に支援に来て下さった方、熊本のために祈って下さっていたことが、とても心の支えになり、教会の強いつながりを感じました。

震災で失ったものもありましたが、震災を通して得たものもありました。

ボランティアで大学生と知り合い、月例会に来てくれたこと。近所の小学生が続けて教会に来て、聖書の話の聞くようになったこと。地域の方たちから「キリストさん」として受け入れられつつあること。

ボランティアが撤退していく中、震災から2年半たった今も九州キリスト災害支援センターは益城町に根付いた支援を続け、KGKは毎月学生を送ってくれています。熊本のためにたくさん祈りがあったことや多くの犠牲を払ってボランティアに来て下さったこと心から感謝します。

これからも復興と共に熊本の救いのために用いられていく教会でありたいと思います。

渡辺咲季（長崎大学2年）

「伝道には2つの方法がある。一つはストレートに福音を伝えること。そしてもう一つは愛のある私たちの行動で神の栄光をあらわすこと。」

私にとって4回目の熊ボラで九キ災スタッフの方が語られたこの言葉は、今でも心に残っています。

初めて参加したのは震災からちょうど1年経った頃。まだ崩れた家や塀が多く残る町で、被災した家から家財道具を運び出し、不要なものの処分の手伝いをしました。その時に印象的だったことは、私たちにとっては一見廃棄するものに見えても、被災された方にとってはいろいろな思いのこもった財産であるということです。私の実家も2018年6月の大阪北部の地震で被災しました。思い出のコップが割れた写真を見て、他の人にとっては不燃ごみでしかないその破片も、私にとってはすごく大切に、苦しく辛いことでした。ましてや大切な人や家を失った傷は、私たちの力で癒せるものではありません。私に何ができるのか、葛藤したのはじめての熊本でした。

2回目以降のボランティアでの主な活動は、仮設住宅での交わりのサポートでした。おばあちゃんと編み物をしたり、子どもたちとスパイごっこをしたり、一見なんの支援になっているのかと思えることでも、その小さな働きを主が用いてくださると信じて全力で取り組みました。しかし、しまいには帰るとき「ありがとう。」と声をかけてくださるその笑顔に、私が励まされ、私にはその日会った一人一人に主からの本当の癒しがあるように、と祈ることしかできませんでした。

私のこれまでの行動で神の栄光をあらわせたのかは、神様しか分かりません。しかし、共に活動してきたKGKの仲間や九キ災スタッフの皆さんの忠実に仕える姿は輝いていて、私もボランティアだけでなく普段からそうありたいと強く思いました。未熟な私ですが、いろいろな場所で用いてくださる神様に感謝し、これから遣わされる地にも期待しています。

『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ、またあなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』 (ルカ10:27)

橋本真由美 (広島大学大学院2017年卒業)

わたしが熊本ボランティアにはじめて訪れたのは、震災から約1年後のことでした。実家が熊本市内にあるため、震災後も何度か帰省をしていましたが、震災後はじめて目にする益城町は、まるで地震から時間が止まっているのではないかと思うような景色も多々あり、大きなショックを受けました。震災の被害を目の当たりにしてはじめて、震災を現実として受け止めることができたような気がしました。

ボランティアに参加して多くのことを感じましたが、一番に「仕える」ことの難しさを痛感しました。そこには参加する前に考えていた「仕える」ということと大きなギャップがありました。「役に立ちたい。」「困っている人を助けたい。」そんな高慢なことを考えていたわたしの心を、神様はボランティアを通して見事に打ち砕かれ、相手(被災者)の立場に立って寄り添うことの大切さを教えてくださいました。自分にできる働きは本当に僅かでしたが、それでも神様はわたしに何度もボランティアに参加する機会を与えてくださいました。毎回のわたしの点としての働きを神様が用いてくださり、その点を線へとつなげ、さらに大きなご計画へとつなげてくださることを期待し、これからも自分にできる精一杯の働きをささげていきたいと思います。

ボランティア中に被災者の方に神様のこと、信仰のことを直接的に語ることはありませんでしたが、「キリスト」の名を背負って活動をすることは、大きな証になったのではないかと思います。また、ボランティアの経験をノンクリスチャンの家族や友人に話す際に、神様のことを伝えることができたのは、わたしにとってとても感謝なことでした。

ボランティアへのきっかけを与えてくれた九州地区のKGKに、また、大変な中これまでずっと働きを続けてこられている九キ災に、何よりもいつもわたしたちに変わらない愛を注いでくださる神様に心から感謝をして、これからもこの尊い働きのため、熊本のために祈り続けたいと思います。

李起春 (広島市立大学大学院2018年卒業)

「人手が足りない」「交通費支給」「時間は捻出できる」三拍子がそろったと思ったので自分がいかなければならんと思った。誰か行くだらうと言ったらダメな気がした。

通行人から隣人となってあげたサマリア人のように、手の届く所にいる人々に行かない選択肢はなかった。そして後に、本当に行くべき場所であったと確信できた。

ボランティア中は、「全部が絶対楽しくない作業」であると意識していた。自分たちにとっては単なる作業であるが、被災者にとっては全てが痛みである。「泣くものと共に泣きなさい。」（ローマ12:15）ボランティアの間、この言葉が心に刺さりつづけた。「この庭、このままでちょうどよかったんだけどね…。」お孫さんといっしょに埋めたビー玉が並ぶ小道と庭の木陰を惜しむ声が今も心に残る。

また、ボランティアに関するすべての過程で、本当に愛するという事について語られた。自分の考えや思いだけで、愛そうと思っていても、うまくいかないと思えられた。本当の需要がわからなければ、正しく供給することはできない。自分勝手に愛することは、むしろ毒となりうる。いろんな難しさを覚えるが、結論は常に「イエスさまに見習ってイエスさまが愛してくださったように愛すること」であった。

私が思うに、ボランティアは自分の達成感や経験、満足などのために行うものではない。隣人の必要を捉え、自分の利益を顧みず、自分を殺し、十字架を背負う。これは、私たちがイエスキリストに見習って行うべき献身の分かりやすい例である。徹底的にイエスの愛に生きるとき、その愛をさらに深く知り、愛に満たされる。そしてその愛を通して、さらに隣人を愛することができる。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かに身を結びます。」

ヨハネによる福音書12:24

新垣義也（明治大学4年）

「自分なんかがこのボランティアに参加していいのだろうか？」

私がボランティアへの参加を決めてから、ずっとこのことが心のどこかにあったように思います。なぜなら、なんの知識も経験もない私が、しかも二泊三日という短い期間で何ができるのだろうか、という焦りや不安があったからだと思います。

前日入りした日の夜、ミーティングがありました。そこで松尾主事から5000人の給食のメッセージがありました。そこには、自分の持っているものは決して十分ではないけれど、勇気を持って捧げた少年と、それを受け入れ祝福し、いく倍にも増し加えてくださったイエス様の姿がありました。その御言葉は、まさにボランティアを直前にして、焦りや不安を抱えていた私に語られたものでした。もちろんボランティアは1人でやるわけではないし、なにより神様のためにする活動である事に改めて気付かされ、いまの自分が出る精一杯を捧げようと決心しました。

ボランティアの内容は多岐に渡りました。いわゆる力仕事から、室内で出来る作業、さらには子供たちとふれあう時間までありました。

活動をする中で、必然と現地の方と話す機会があり、震災の時のことをお聞きしました。ニュースを通して知っていたものを、目の前の人から直接聞くインパクトは相当のものでした。特に、「町は時間と共に元通りになっていくけれど、私の心はあの時から止まったまま。」と言っていたのが心に残りました。確かに、震災から2年が経ち、街の景観は元に戻りつつありました。これは震災直後からその時まで、数えきれ

ない人が、ボランティアとして尽力した結果だと思いました。また、出来ることはわずかだったけれど、その働きに私も加えていただけたことに感謝しています。

それと同時に、人のこころが癒されるのには時間がかかることを知りました。私たちの努力で町は元通りになっても、人の心を癒し、回復させて下さるのは神様であって、祈りたいと強く思わされました。

ボランティアを通し、現地に行き、見て体験して、行かなければ分からなかったことをたくさん知ることができました。それだけでなく、語られた御言葉から、またクリスチャンとしてボランティアに携わる中で、自分の信仰が見直され、新たな気付きも与えられました。なにより、そこで与えられた、被災された方々の為に祈ろうという思いを忘れることなく、持ち続けたいと思います。

主に感謝しつつ。

5. 隣人愛としての災害支援―「愛するとは？」を問われつつ

横田法路（NPO九州キリスト災害支援センター理事長）

イエス様が教えられた最も大切な戒めは、「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」、また「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」（ルカ10:27）でした。これこそ、神様がわたしたちクリスチャンに求めておられる生き方です。でも、隣人を愛するとは、いったいどういうことでしょうか？ 一見自明のように思うのですが、実際は、よくわかっていないことがあるように思います。私自身、長い間、知識としての理解でとまっていた、体験的な理解にまでは十分至ってなかったように思います。

ルカ福音書10章25-29節に出てくる律法学者も、同じような問題を抱えていたのかも知れません。

神を愛し、隣人を愛することの大切さを彼は知っていました。そこでイエス様は彼に対し、シンプルに、「それを行いなさい。」と言われました。律法学者は、正解を知ってはいても、実際には行っていなかったのでしょうか。そのような「自分が正しいことを示そうとして」、隣人愛の問題を複雑化しようと、再びイエス様に尋ねます。「では、わたしの隣人とはだれですか?」。そこでイエス様は、「良きサマリア人」のたとえ話をされたのです。

エルサレムからエリコに向かう途上で、一人の人が強盗に襲われます。瀕死の重傷を負うわけです。そこに祭司とレビ人が通りかかります。彼らは倒れている人の存在には気づいていましたが、道の反対を通して、その場を過ぎ去ります。なぜでしょうか。祭司またレビ人は、自らの働きのためには、「きよさ」を保たなくてはなりません。もしその人が生きていればもちろん助けることができますが、もしすでに死んでいたら、その人に近づくことで、自分が「汚されてしまう」こととなります。その結果、祭司またレビ人としての自分の働きができなくなってしまう（自分の生活に支障をきたす）。彼らはそのようなリスクを避けるために、倒れている人に近づくこと、関わることを避けたのでした。

しかしながら、そこに一人のサマリア人が通りかかります。サマリア人は、歴史的な理由でユダヤ人から軽蔑されていました。しかしながらその彼が、倒れている一人のユダヤ人を見て「かわいそうに」思い、その人に近寄り、傷の手当てをします。それから彼を自分の家畜にのせて宿屋に連れていき、そこで介抱します。彼は宿屋の主人に彼の世話をお願いし、そのための費用を支払います。そして彼をあずけて、再び旅を続けます。もし費用がもっとかかったら、帰ってきて支払うことを言い残して。

このたとえ話の重要なポイントは、次のことです。この話は、律法学者の「では、私の隣人とはだれですか?」の問いから始まりましたが、その話を締めくくるイエス様からの問いは、「だれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思うか?」です。つまり、イエス様が求めているのは、助けを必要としている人に出会うとき、見て見ぬふりをして通り過ぎるのではなく、「その人の隣人になりなさい。」ということです。隣人になる時、その人の必要がわかってきます。そうして、自分のもっているもの、できることなかで、相手の最善に向けて仕えていくのです。このように、助けを必

要としている人の隣人になること、それが「愛する」ことの始まりです（「関係性が、行動を変える」）。

このような具体的な状況の中で愛するとは、当然、観念的なものではなく、具体的・実地的なものです（傷の手当てをする）。そして相手のニーズや状況の変化にあわせて、活動も次々に変化していくものです（家畜に乗せ、宿屋に連れていき、介抱する）。それはまた犠牲を伴うものです（費用を支払う）。一人ですべてを背負いこむことではなく、チームですることです（宿屋の主人にゆだねる。「バウンダリー（境界線）も大切」）。

それでは、この助けを必要として倒れている人は、いったい誰のことでしょうか。それが、わたしであり、またあなたなのです。サタンに襲われ、深く傷つき、助けを求めているわたしたちの傍を、多くの人が通り過ぎていきます。しかしそこに現れてくださったのが、イエス・キリスト様です。ご自身の十字架の犠牲の愛をもって、わたしたちを助け起こし、介抱し、イエス様の御名によって立って歩むことができるようにしてくださったのです。そのような救いを体験した者として、イエス様の最後の命令の言葉、「あなたも行って同じようにしなさい。」（ルカ10:37）を聞き、そして従いたいと思います。

神様は、わたしたちの歩む人生においても、助けを必要としている人を置いておられません。そのような人に出会う時、わたしたちが隣人になろうとするかどうかを神様は関心をもって見ておられるのではないのでしょうか。そしてイエス様は、あなたがそのような人の隣人になることを求めておられるのです。

災害支援は、このような隣人愛の実践であると思います。ある日突然の災害によって傷つき、痛み、苦しんでいる人の存在を、わたしたちは知ることになります。その時、神様はどのようにわたしたちに行動することを願われているのか、わたしたちは祈りの中で、主に聞きたいと思います。そして主からその人の隣人になるように導かれるならば、信仰と勇気をもって、一步踏み出しましょう。その時、そこに、神様は素晴らしい恵みを準備してくださっています。被災された方の人生だけでなく、その方に関わるあなたの人生にも、双方向の変化・愛の成長が起こります。これは不思議ですが、真実です。

わたしにとっての災害支援は、一人の友人との出会いから始まりました。熊本地震の8か月前、福岡市の大濠公園にあるスターバックスで待ち合わせをし、そこで数時間、話し込みました。お互いの家族のこと、信仰のこと、教会のこと、そのようなことを分かち合う中で、二人の間に、神様が友情を育んでくださいました。その友人が熊本ハーベストチャーチの中村陽志牧師です。そして、2016年4月14日と16日に、最大震度7の熊本地震が起きます。彼は、一回目の地震が起るとすぐに、友人の牧師たちと一緒に支援に動き出します。ところが、二度目の地震では、自分も家族も教会も大きく被災してしまいます。それでも彼は、もっと困っている人たちのための支援活動に奔走するのです。そのことを知ったわたしは、被災地の諸教会をサポートするための支援会議を、震災の翌々日（4月18日）に開催することにしました。全国各地から、支援のために協力しようとする方々が集まってくださり、そこに中村先生が来て、現状を報告して下さることになったのです。

支援会議が始まった、ちょうどその時、中村陽志先生が到着し、部屋に入ってこられました。震災後、避難所での支援のために奔走されていた先生は、疲れ切った様子で、ひげものび、寝間着姿のような格好で席に着かれました。早速先生に話してもらおうとマイクを渡したのですが、先生の口からは言葉がなかなか出てきません。かわりに涙がツート頬をつたいました。「何で涙が出るんだろう。」とつぶやかれ、尚しばらく沈黙が続きました。ついに先生の口から出た最初の言葉が、「わずか数十秒で、こんなに多くの人の人生が変わってしまうなんて・・・。」でした。それから熊本の被災状況について、そしてこの数日間取り組んでこられた支援の内容について話されました。それを聞いていた私は、心の中でこのように思いました。

「自分や家族、また自分の教会も被災されながら、他の被災者たちの支援のために奔走されているこの先生を、つぶしちゃいけない。」

中村先生の説明の後、わたしはこのような発言をしたように思います。

「東日本大震災の経験からわたしたちが学んだことの一つは、支援の継続の大切さだったと思います。そのような継続をとおして、キリストが証されていったということ。しかし、それが可能となるには、被災地以外の教会が、どのように被災地の教会の支援に関わることができるかに、かかっているのではないのでしょうか。」

そこに出席された先生方から、いろいろな情報や積極的な支援の申し出もなされました。その会議の最後に、出席されていた先生方の中から、これが単なる話し合いで終わるのではなく、具体的に被災地の教会並びに被災地支援を後方からサポートする組織を立ち上げるべきではないかという意見がだされました。そして、その会議の総意として、新しい支援組織を設立することになり、同時にその代表責任をわたしが担うようにとされました。

わたしは、責任の一端を担う覚悟はある程度していましたが、いざその時になると、やはり恐れがやってきました。この責任を引き受けるということは、もはや後戻りはできません。この災害支援はいつまで、そしてどこまで続けるのだろうか。本当に自分にやれるのだろうか。そのようないくつもの恐れがわたしの心を瞬間的に占めました。先の見えない真っ暗なトンネルの中に、車が猛スピードで突っ込んでいくような感覚と言えいいでしょうか。

でも次の瞬間、わたしの心に湧いてきたのは、自分のこれまでの信仰の歩みの中で、何か大切な決断をする時に、いつも問いかけてきたことでした。「神様が喜ばれることは何だろうか？」

その場にいたわたしたちが共に考えたことは、「支援の重荷を被災地の教会だけに負わせてはいけない。被災地以外の教会、わたしたちも、その支援の重荷を、少しでも共に負わせていただく。」ということでした。「愛するとは、共に重荷を負うことである」ことを、神様はわたしたちに教えて下さったのです。

互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を全うするであろう。
ガラテヤ6:2

このような生き方を、神様はきっと喜んでくださる。そうであれば、わたしにそれができるかどうかは、もはや、第一の問題ではない。ただ、神様の喜ばれることをしよう。神様が喜んでくださることであるならば、神様はまた必要な力を与えて下さるはずだ。

主は御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心をご自分と全く一つになっている人々に力をあらわしてく下さるのである。Ⅱ歴代誌16:9

神様はこのように、災害の痛みと支援の重荷を、少しでも、共に担おうとする愛の心を、わたしたち一同に与えてくださいました。そして、キリストにある同じ志をもつ方々と共に、支援の働きに立ち上がらせていただきました。これが「九州キリスト災害支援センター」の始まりです。

あの時から、間もなく3年になろうしますが、今振り返って思うことは、これは人のわざではなく、ただ神様のあわれみによる奇跡としかいいようがありません。神様は本当に素晴らしい。神様はお約束のみ言葉通りに、支援の重荷を共に負ってくださるキリストにある兄弟姉妹を、九州各地、日本各地、さらには世界各地に起こして下さっていたのです。

もちろん大変さがないというわけではありません。支援活動の内容は、時間の経過に伴うニーズの変化に対応してどんどん変化していきました。私自身、体力的に、精神的に、時間的に、「しんどいな」と思うことが何度もありました。しかしその度に、「重荷だから、重いのは当たり前。今感じているこの重みこそが、愛するということなんだ。」と思うと、不思議な喜びがわたしの心の内から湧き上がってきました。

災害は確かに多くの人に痛みをもたらします。しかし災害でなくても、私たちは、また私たちの身近な人たちも、様々な痛みや苦しみを経験しているのではないのでしょうか。そのような人と出会っても、その人と関りを持たないように生きていくことは可能です。しかしながら、その人の痛みや苦しみを、少しでも共に担って生きようとすることもできるのです。後者の歩みの中で、わたしたちは、「愛する」とはどういうことかを体験的に学んでいくのです。わたしたちの人生の大切な意味の一つは、このように、「愛する」ことを学び、成長していくことにあります。そして、そのような愛の生き方の中に、世の人はキリストを見出してくださるのです。

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるであろう。」

(ヨハネ13:34-35)

このことに関心のある方は、是非、『「キリストさん」と呼ばれて一支援の現場から宣教を考える』（九州キリスト災害支援センター編 いのちのことば社 2018年）を、お読みください。そこに沢山の事例が出てきます。

最後に一言、どうか恐れなくて、ともに進みましょう。主に祈りつつ、レッツ トライ！

6. 熊本ボランティア活動記録 (2018年11月現在)

2016年

4月30日	第一便	熊本ボランティア (九州7名、主事1名)
5月 4日	第二便	〃 (九州3名、中四国2名、主事2名)
6月18日	第三便	〃 (九州5名)
7月23日	第四便	〃 (九州4名、主事1名、協力者1名)
8月18~19日	第五便	〃 (九州4名、東海1名、主事1名)
9月13~14日	第六便	〃 (九州3名、関東3名、中四国2名、主事3名)
10月15日	第七便	〃 (九州2名、主事1名)
11月26日	第八便	〃 (九州4名、主事1名)
12月10日	第九便	〃 (九州2名、北陸1名、主事1名)

2017年

1月14日	第十便	〃 (九州3名)
2月14~15日	第十一便	〃 (九州3名)
3月 6~ 7日	第十二便	〃 (九州3名、中四国4名、主事1名)
4月15日	第十三便	〃 (九州2名)
5月 3~ 5日	第十四便	〃 (九州5名、中四国2名、卒業生1名)
6月17日	第十五便	〃 (九州1名、主事1名)
7月 8日	第十六便	九州北部豪雨被害のボランティア活動との兼ね合いで中止
8月21~23日	第十七便	朝倉市ボランティア (九州1名、関東1名)
9月 5~ 6日	第十八便	熊本ボランティア (関東1名、東海2名、主事1名)
10月21日	第十九便	〃 (九州3名、中四国1名、主事1名)
11月23日	第二十便	〃 (九州1名)
12月 2日	第二十一便	〃 (九州2名)

2018年

1月11~12日	第二十二便	〃 (九州2名、主事1名)
2月17日	第二十三便	〃 (九州5名)
3月10日	第二十四便	中止
4月 4日	第二十五便	熊本ボランティア (九州5名、関東3名、東海2名、沖縄2名、主事2名)
5月26日	第二十六便	〃 (九州3名、卒業生1名)
6月 9日	第二十七便	〃 (九州5名)
6月23日	第二十八便	〃 (九州6名)
7月14日	第二十九便	〃 (九州 6名)
8月11日	第三十便	中止
9月 3~ 5日	第三十一便	熊本ボランティア (九州1名、関西1名、東海1名、東北2名、主事1名)
10月 6日	第三十二便	〃 (卒業生 1名)
11月10日	第三十三便	〃 (九州 4名)

7. 【資料】熊本災復興支援ボランティアKGK派遣チームオリエンテーション 『ボランティアとしての自覚と責任』（2016年4月22日）

KGKは3.11東日本大震災の際、学生と主事が被災地に継続してボランティアに行きました。そのボランティア活動の経験を通して、田中秀亮元主事が「ボランティアをする上で自覚し、配慮しておいた方がよいこと」をまとめてくださいました。とてもよい資料なのでお読みください。 ※松尾加筆。

1. 仕える姿勢

・「隔たり」をわきまえる

被災された方々は家族や家や仕事を失い途方に暮れています。ただ、ボランティアと接しているときは、そうした部分はあまり見せず、こちらからは意外にも「普通に」見えるかもしれません。また、ボランティアの働きに感謝をしてくれたり、お話をうかがう中で分かり合えたと思うこともあるでしょう。しかし、忘れてはならないのは、被災者の方々とボランティアの間には大きな「隔たり」があるということです。私たちの知り得ない悲しみや怒りや不条理などを内側に抱えながら、私たちに相対しているのです。どんなに働きが喜ばれて感謝をされても分かり合えるわけではありません。また、たとえ自分も類似した経験（例えば、阪神淡路大震災で被災した経験）をもっていたとしても、その経験を分かち合うことがよいとも限りません。逆に自分の経験則を相手に押しつけて、相手を苦しめることもあります。私たちは「感謝されることをしたい。」「相手の苦しみを共有してわかり合いたい。」と無意識のうちに思いますが、それすらもこちらの都合です。被災者と距離を縮めることがボランティアの目的ではありません。必要なことは、今、目の前にいる被災者に、何がどれくらい必要か、必要でないかを考えながら仕えることです。そのためには、被災者と私たちの間にある「隔たり」をわきまえなければなりません。

※これは熊本でも私を感じたことでした。また、服装にも気を付けましょう。（遊びに来ているような恰好にも注意）写真も無許可でとることを控えましょう。

・自分の充足感のためにはなく

ボランティアの初日こそ、被災地を目の当たりにして衝撃を受けますが、それは日に日に慣れていきます。更なる刺激を求める心が生まれてきます。そして「より大変な人々を助けたい。」「より悲惨なところに行きたい。」といった衝動に駆られることがあります。単調な作業のために自分は休みとお金を費やしたのではないという思いすら出てくるかもしれません。しかし、こちらの充足感を満たすためにボランティアに来たわけではありません。被災地の方々が今日を生き、明日を生き、未来を生きる。そのために必要とされていることは、どんなに単調で、地味なことで、苦手なことであってもするのです。自分がしたいことではなく、相手に必要なことをするのです。

これは実際にあったことですが、あるボランティアの方が、自分の思う通りに作業が進まず、その怒りを全く関係のない他のボランティアに怒鳴り散らしていたのを見

ることがありました。その方の言い分もあったようですが、何のためにボランティアに来ているのが問われる思いでした。

・言葉への鋭敏さ

被災地の方々と接する時にまず配慮すべきことは言葉です。被災地の方々と過ごすときには神経を研ぎ澄まし、言葉をよくよく吟味しました。

例えば「ゴミ」という言葉です。泥だらけになった家具や食器などは、ボランティアから見たら「もう使えなくなったもの（ゴミ）」に見えてしまい、ついうっかりと「このゴミ、どこに捨てたら良いですか？」と言いそうになってしまうことがあります。実際、この言葉を使っているのを聞いたことがあります。しかし、被災者にとっては、それらはたくさんの思い出と愛着が詰まったものかもしれません。そうしたものをこちらが「ゴミ」と言い放ってしまうことのもつ影響も考えなければなりません。また、たとえ被災地の方々が「ゴミ」と言ったとしても、私たちが同じように「ゴミ」と言っても良いということにならないでしょう。そういわざるを得なくなった被災者の気持ちを慮ることが大切です。

・臨機応変

現地では求められるニーズが時々刻々と変わります。臨機応変に仕える姿勢が求められます。「昨日と説明していることが違うじゃないか！」「さっき話したことと違うじゃないか！」と言うのではなく、「やってください。」と言われたことをする姿勢が大切です。受け入れ側から見て、「使いにくいボランティア」と映ってしまったはお互い不幸です。

臨機応変さが求められるのは、働きの面だけではなく、生活の面においても同様です。事前に聞いていたこと（例えば、電気やガスは使える、布団はあるなど）が、現地に来てみたらそうではなかった、もしくは途中で変更するということもあります。事態は変わるものだけに受けとめていくしなやかさ、そして、どこでもやっていくタフさが必要です。私の時は寝床が途中で教会堂から隣の長屋に変わることがありました。

※大分・熊本地震を受けた際、すぐ超教派で「九州キリスト災害支援センター」を立ち上げました。そして立ち上げと同時に、多くの教会から九キ災に連絡が殺到しました。「物資は何が足りないですか。」「どこにいけばよいですか。」想像しただけでも、九キ災の事務がいかに大変であったか想像できます。色々な連絡が一度に押し寄せる事で、臨機応変の対応が出てくるでしょう。ですから九キ災と連絡がうまく取れない事や、事前に聞いていたのと違うボランティア内容が入ることも出てきます。私たちはそのスタッフの気持ちになって臨機応変の対応にも心からお仕えしたいと思います。

・リーダーの指示に従う

現地のリーダー、KGK派遣チームのリーダー（主事）、両方のリーダーの指示に従ってください。ボランティアの働きは様々な団体と協力しながら進めていくものです。チームワークがとても重要です。チームワークが乱れると全体に影響を与えます。たとえば被災者の方々から直接何かをお願いされても、まずはリーダーに相談してください。「被災者の方からこれこれをお願いされたので、やっておきました。」というスタンドプレーはくれぐれもないようにお願いします。もし何か依頼を受けたら、まずはリーダーに相談し、その上で対応するようにしてください。報告・連絡・相談を徹底してください。

私がボランティアした時も、ある学生が被災地の方から「○○して欲しい。」と頼まれて、それを現場監督に相談せずにやってしまい、叱られたことがありました。現場監督は再三「それは今回はやらなくて良い。」と伝えたのですが、被災者の家族が「できるならやって欲しいです。」と言われたので、やってしまったということでした。

ここまで言うのは、ボランティアは作業によっては危険を伴うものがあるからです。瓦礫の中での作業には危険が伴います。現場監督や引率者はボランティアの安全を管理する責任にいます。特に、既にボランティアの経験があり、この手の作業は大丈夫だと思っている場合は気をつけてください。「今回のボランティアにおいては初心者である。」という意識で取り組んでください。

・感謝を忘れない

「感謝されること」を期待するのではなく、こちらから感謝の気持ちを持ちましょう。

私たちが被災地に入れることも、そこに何か月もいてくださってスタッフをしてくださっている方がコーディネートをしてくださるからです。私たちが2、3日お仕えできるのも、被災してもなお、自分の教会に外部の宿泊者を泊めてくださることを許してくださる教会があるからなのです。

ですから使わせていただいた教会への宿泊の謝礼や、掃除や言葉で感謝を伝えることを忘れないようにしましょう。

2. 自己管理

・無理をしない

ボランティアの期間は心身共に疲弊します。それでも具合を悪くしたり、怪我をしないようにすることが必要です。それにはまず十分な休息をとることです。「短い期間だから大丈夫。」「今日は短い時間だったから大丈夫。」と高をくくらないにしてください。被災地では神経を研ぎ澄まし、臨機応変に事にあたり、いつ何が起こるかわからない中で仕えています。いつも緊張しています。また、ボランティアをしているなかで、役に立ったという充実感や喜びを覚える一方で、ボランティアの限界というものも実感すると思います。自分たちにできることはごく僅かであり、それに伴う徒

労感のようなものもあります。また、ボランティア中の生活は、普段出来ていることが普通にできません。食べること、風呂に入ること、寝ることなどにおいて制限とストレスがかかります。24時間集団生活のため、プライベートな時間と場所はほとんどありません。こうした状況下にあるので、普段以上に心身は疲れます。緊張状態が続くので、あまり疲れを実感しないかもしれませんが、実際は疲れていると思ったほうがよいです。従って、まずは十分な休息をとることです。よく食べ、よく寝ることです。

・分かち合う

私がボランティアに参加した時は、毎晩、メンバーと一緒にみことばと分かち合いの時を持っていました。その日にあった出来事をふり返り、みことばに聞き、その日の出来事の意味付けをしていくのです。胸のうちにある様々な思いを外側に出すこと、そこに意味が与えられていくことにより、私たちの心が守られていきます。また、仲間の思いに耳を傾けることで、お互いを知り、お互いを配慮していくことにもなります。

・明確で迅速な意思表示

ボランティアの作業中は「大丈夫です。」「無理です。」「○○をお願いします。」などの明確な意思表示が必要です。例えば重いものを運ぶ時、「重いので無理です。あともう一人お願いします。」「階段を降りるのでゆっくりお願いします。」などの明確な意思表示が必要です。当然だと思いうことでもあえて言葉に出して、お互いの意思を細かく確認し合って作業に取り組むことが大切です。また、聞かれたら答えるのではなく、自ら発信しましょう。こうした積み重ねが事故を未然に防ぐことにつながります。

また、健康面においても、体調が悪くなったら報告するのではなく、悪くなりかけたら、またその兆候が見えたら早めにリーダーに相談してください。無理をして体調を悪化させて、病院に行かなくてはならないという事態は避けたいものです。早めに対応できれば、その日はボランティアを休む、軽めの作業に切り替えるなどの対応ができます。

熊本ボランティアを通して

発行：2019年2月

企画：KGK九州地区学生会

代表：米森千裕

表紙・裏表紙：森悟

監修：松尾献（KGK九州地区主事）

編集：鈴木俊見（KGK中四国地区主事）

発行者：キリスト者学生会

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-10CCビル3F

03-3294-6916 / office@kgkjapan.net

